

授業科目名	海外実習 B	担当教員	藤野 一夫 岡元 ひかる
必修の区分	選択		
単位数	2単位		
授業の方法	実習		
開講年次	2年第2クォーター		
講義内容	南西ドイツのフランスとルクセンブルクとの国境に位置するトリア大学日本学科を拠点に、トリア大学及びトリア市立劇場との連携において3週間の海外実習を行う。また、ルクセンブルク大学との国際演劇コースとも連携し、国境を超えた演劇の国際性について学ぶ。さらに、2022年夏にドイツ中部カッセル市で開催される世界最先端の国際芸術展「ドクメンタ」や首都ベルリンのアートシーンを視察し、ドイツにおける多文化共生を目指す文化政策とアートマネジメントの実際について研修する。		
到達目標	<p>①最先端の劇場運営システムの研修は、世界トップレベルにあるハンブルク州立歌劇場での研修プログラムを始め、技術監督による巨大な制作工房、劇場舞台裏の見学、デルノン総裁自身による解説と意見交換など行う。同様に、エルプフィルハーモニー、ドイツ演劇座、社会文化センター「モッテ」、トリア市立劇場、ルクセンブルク国立劇場等でも、総裁やドラマトウルクによる工房や舞台裏見学、レクチャー、意見交換を積み重ね、都市規模、ジャンル、地域ごとに異なる芸術文化施設運営の多様性について、通常では踏み込めない領域まで実地に学ぶ。</p> <p>②ハンブルク・ドイツ座専属女優の原サチコ、本学の岡元ひかる助教らによる演劇及びダンス（舞踏）の講演やワークショップを通じて、芸術による国際文化交流の理念と技法を学ぶ。またトリア大学では山中教授の専門分野である異文化理解についてのワークショップを通じて、身体性と言語化の両面から、文化や思考の違いについて深く学び合うことができる。</p> <p>③芸術×文化×観光によるまちづくりの多様性の学びは、日本とくに但馬との比較を意識して実施する。ドイツ（およびルクセンブルク）の大都市（ハンブルク）、中都市フランクフルト、小都市（リューベック、トリア）が、それぞれ芸術と文化と観光をいかに架橋、融合することで、都市の多彩な資源を磨き、個性的な輝きを創造・発信しているかについて、生きた学びを修得。その刺激とアイディアを日本の都市、地域の芸術×文化×観光によるまちづくりに応用する基盤を修得する。</p>		
授業計画	<p>期間：8月下旬～9月上旬の3週間 引率者：藤野、岡元、山中（トリア） (参考として2023年度のスケジュールを挙げるが、詳細の決定は2024年4月初旬の予定)</p> <p>8/22 関空発、台北経由 フランクフルト早到着、ICEでベルリン移動 オリエンテーション</p> <p>・26 菅尾友の演出WS(コットブス州立劇場)</p> <p>27・28 ベルリン博物館群研修(ホフマン学芸部長)</p> <p>29 午前ハンブルクへ移動 原サチコの演劇WS</p> <p>30・31 原サチコの演劇WS</p> <p>～9/2 ハンブルク州立歌劇、ドイツ演劇座 エルプフィルハーモニー、社会文化センター カンプナーゲル等での研修プログラム</p>		

	<p>9/3      ハンブルクからトリアへ移動（8時間）  レーゲルスベルガー教授によるトリア市内文化資源調査  山中教授+レーゲルスベルガー教授による異文化理解WS  山中教授らWS、トリア市立劇場研修  トリアからフランクフルトへ移動（4時間）  フランクフルト午前発  台北経由、関空着12時、豊岡夕方着</p>
事前・事後 学習	①4月に募集を開始し、早期に選抜を行う。定員は10名前後。5月よりドイツ語・ドイツ文化に関する事前学習を開始し、8月後半～9月前半の3週間でドイツ実習を実施する。10月に事後学習を開始し、年末までに報告書（40ページ程度）を作成する。
テキスト	特になし。
参考文献	適宜指示する。
成績評価 の基準	実習の積極的関与（50%）、実習報告レポート（50%）
履修上の注意 履修要件	全日程に出席できることを参加条件とする。 1日の実働時間は8時間（休憩1時間を含む）を基本とする。 海外実習の性格上、業務の必要に応じて変則時間となる場合がある。 ※具体的なスケジュールは、劇場担当スタッフと相談の上、後日確定する。
実践的教育	該当しない。
備考欄	実習受入先の受け入れ人数を越える履修希望者があった場合は、説明会の後に提出を求める「志望理由書」を元に選考して履修者を決定する。面接を行う場合もある。